2025
6
令和7年6月10日発行（毎月1回10日発行）　通巻382号

人生100年時代　共生社会の生き方情報誌

さあ言おう

公益財団法人
さわやか福祉財団

（写真は昨年の
全国交流フォーラムの様子）

さわやか福祉財団

2025年度
全国交流フォーラム開催のお知らせ

当財団の「新しいふれあい社会づくり」をご支援いただいている皆様と一堂に会し、幅広い情報交換と交流を目的とした今年度の全国交流フォーラムを開催いたします。

2025年7月28日（月）

概 要

第１部　さわやかフォーラム　13:00～15:40
事業報告、トーク等

第２部　さわやか交流会　16:00～17:30
交流パーティー

場 所

第１部：KFC Hall　第２部：第一ホテル両国
（東京都墨田区　都営地下鉄「両国」駅・ＪＲ「両国」駅最寄り）

参加費

第１部：無料
第２部：運営協力金として2,000円（当日受付にて）

- さわやかパートナーをはじめとするご支援者の皆様には、別途案内状を郵送いたしましたので、お申し込みはそちらをご利用ください。
- 詳細は、財団ホームページにも掲載しております。

お問合せ

電　話　(03) 5470-7751　全国交流フォーラム（担当：中村）
メール　sw@sawayakazaidan.or.jp

皆様のご参加をお待ちしています！

当日は、故堀田力前会長に関する展示も行う予定です

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

さぁ、言おう

2025年6月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

雑談力と共感力

清水 肇子

4 生き方 自分流

出会いに励まされ、優しさを地域へ

子どものたまり場ぽかぽか／川﨑書道教室 代表 川﨑 繁子さん（佐賀県唐津市）

10 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

心が動いた住民と、支援するSC
島に広がるふれあい・支え合い活動

新潟県佐渡市の取り組み

22 シリーズ 定年、その先へ 一地域とのつながり方 2

日本の定年制度の現状

一般社団法人定年後研究所所長 池口 武志

新しいふれあい社会づくりに向けて

18「地域助け合い基金」
助成先のご紹介／状況のご報告

26 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

29 NEWS＆にゅーす

32 活動日記（抄）

⑰『居場所ガイドブック』紹介

㉔日本老年学会総会・合同シンポジウムのお知らせ

㉞『さぁ、やろう』vol.27発行

㉟みんなの広場 / 投稿募集

㊱さわやかパートナーのご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 樋口 恵子

新しいふれあい社会　実現への道

雑談力と共感力

さわやか福祉財団　理事長　清水　肇子

聞く力、話す力、伝える力…など、「何々の力」あるいは「○○力」といった本が、様々ベストセラーになっている。皆さんも1、2冊は頭に浮かぶ本があったり手に取ったことがあるのではないだろうか。「～力」を簡潔に打ち出すタイトルが増えている裏側には、哲学的な視点よりも実務的な考え方や方法をより具体的に学びたいという読者の思いにつなげようという狙いがあると、大手出版社の編集者から聞いたことがある。もちろん対象のテーマにもよるが、定年退職後の第二、第三の人生の中で参考にしようとする人も多いのだという。

では、地域活動ではどんな力が効果的か。今回は「雑談力」と「共感力」を挙げてみたい。

「本は参考になりました。でもその力をどうすれば身につけられるのかがわかりませんでした。明確には書かれていないんです」と、あるシニア男性が苦笑いしながら話してくれた。雑談力に関する本だという。仕事では雑談はむしろ悪で論理的であることが一番に求められてきた。地域活動はそれではうまくいかないと聞いてわかってはいるが、会話も弾みそうになく実際の参加には足踏みするのだという。真剣に学ぼうとする姿に真面目な人柄が伝わってきた。そこで私から、「その気持ちを飾らずに今のように地域活動の皆さんに話せばいいんですよ。それがもう雑談力です」と答えたら、「えっ、そんなことで？　そうか」と、明るくグループワー

クに戻っていった。元々心に壁がない方ならそれで十分だからだ。スモールトークといわれる雑談は、日本でも最近はむしろ業績向上の重要なコミュニケーションとして見直されている。

日本の組織で長年働いてきた人たち、特に責任ある役職で力を発揮してきた人でも、定年後になかなか地域活動で出番を見つけられないという背景には、こうした理由があるのかもしれないと改めて思った。つまり論理的な思考がすべて「良」で、主観的な思考は「劣」であるという意識からはそろそろ脱却すべき時期だということだ。もちろん地域の仕組みづくりでは論理的な思考やモデルは重要であり、当財団も学び合える内容を積極的に発信している。しかしそれと同じくらいに、殊に地域の住民参加においては論理的な理屈だけでは先に進まないという点も理解が不可欠だと改めて強調しておきたい。地域活動は優劣もなくお金儲けも関係ない。エネルギー源は、自分がやりたいかどうか、楽しいかどうか、見捨てておけないかどうかという気持ちであり、動機のポイントは人によって異なる。論理の正しさが必ずしも広がるための原動力や継続性につながるわけではないから、そのバランスが大事になる。

では共通点はないのかといえば、それが共感力であろう。ＡＩの時代だからこそ、まさにこれからの人間にとって重要な能力としてこれも注目されている。大きな社会変革の時代、答えは誰もが手探りだ。求められるのは答えを見つけるための問いの力、姿勢であり、その問いが正しく立てられるためには、地域の状況に心を砕き、困った人に寄り添う共感力が重要となる。そんなお互いの共感を育む関係構築のために、日頃から接点を持ち、自然に語り合える雑談力が大いに効果を発揮する。その環境づくりの場として居場所の活動を位置づけ、参加型の助け合いプログラムを多彩な入口から工夫する。こうして実際に活動に関わって感じてもらうことが不可欠であり、その地道な繰り返しが地域のいずれ大きな財産になっていくだろう。

生き方・自分流

出会いに励まされ、優しさを地域へ

子どものたまり場ぽかぽか／川﨑書道教室　代表

川﨑　繁子さん（佐賀県唐津市）

江戸から明治初頭にかけて170年にわたりクジラ漁で一時代を築き、現在はイカ漁や朝市の活気で知られる唐津市呼子。希望もつらさもあった高校時代、大人になってからもたくさんの出会いと経験を経て、今は大好きな「書道」と「子ども」、そしてたくさんの人たちに囲まれて生きる優しい人をこの地に見つけました。

（取材・文／神保　康子）

川﨑繁子さん。
お気に入りだという
鯨組主中尾家屋敷の前で

子どものたまり場ぽかぽかが
入る民家

坂の途中から見える呼子港

ぽかぽかではみんな自由に過ごす

眼下に何隻もの漁船が停泊する唐津市・呼子港、その向こうには呼子大橋という見晴らし抜群の坂の途中にある民家。「川﨑書道教室」の看板の横には「子どもの居場所」ののぼりがはためく。毎週月・火・木・金曜日の夕方にやっている書道教室から派生したこの「子どものたまり場ぽかぽか」（以下、ぽかぽか）には、水・土曜日もみんなが集まってくる。子どもたちは学校が終わると家にランドセルを置いて、近所の大人はこれといった用事がなくても井戸端会議に、そこに保護者らも来て過ごす。子どもたちと一緒に外遊びをするママもいる。

取材した日も20～30人が出入りして、口々に今日あったことや気になっていることを話し出すのでにぎやかなことこの上ない。皆ひとしきり〝報告〟し合うと、そのままおしゃべりに夢中になったり、庭にテントを張って日向ぼっこをしたり、紙ひこうきを作って飛ばしたり。室内では宿題をする中学生や、額を寄せ合ってゲームをする男の子たちとそれを楽しそうに眺めている子もいる。小腹が空いたら、おやつや大人が作ったおにぎりを頬張ってひと休み。そしてまた別の遊びや宿題に戻っていく。月数回の工作教室などもあるが、普段はみんな自由にしたいことをする。

このあたりも今は子どもが少なくなり、一人で出かけてはいけないと言われている子もいるが、家族から「ぽかぽかならいいよ」と言われて来る子もいる。ときどき学校を抜け出して来る子もいて、そんなときは学校にも連絡している。

保護者たちの何気ない会話で出た「子どもがすぐ大きうなるけん、服が全然足りんよね」という話から、

制服や普段着の〝お譲り〟がここで始まり、今では年1回、公民館で「おゆずり会」をするまでになった。

〝書道欲〟が爆発

書道教室にとどまらないこの場所の代表者は、みんなから〝しげちゃん〟と呼ばれ親しまれる川﨑繁子さん（42歳）。呼子の隣町、豊臣秀吉の名護屋城で知られる鎮西町（現・唐津市）で生まれ育ち、書道が大好き。師範の資格を持っており大の子ども好きでもある川﨑さんが、自宅キッチンで書道を教え始めたのは2019年のことだ。

「息子が小学1年生の頃で、硬筆・毛筆の宿題を持って帰ってきたんです。それで筆を握らせていたら、しばらく離れていた書道を〝やりたい、教えたい〟欲が爆発しちゃって（笑）。『習字するからみんな来て！』って近所の子たちを集めて無料で始めちゃいました」

知人のアドバイスもあり、20年4月からは月謝制の書道教室として生徒5人からスタートしたが、しばらくすると子どもたちから「教室以外の日も来たい！」「教室の生徒じゃないけど来たい！」という声が上がってきた。

「私自身が子どもたちといると楽しくて、『学校帰りに寄らんね』って」

こうして、「困ったときはいつでもおいで！　困ってなくてもいつでもおいで！」をモットーに、ぽかぽかの原型が誕生した。

忘れられない恩師との出会い

川﨑さんを語るに欠かせない書道。出会いは小学2年生の頃で、近所の書道教室に「字が上手くなれたら」くらいの気持ちで通い始めた。「そこが本当に楽しくて。小児喘息だったんですが、学校は休んでも書道教室には行っていました」

60人ほどが通っていたその教室はバーベキュー大会などもあり、違う学年の子とも仲良くなれた。「楽しい思い出しかないですね。静かに座って書くのも大事だけれど、子ども同士のつながりが、長く通った大きな理由」と懐かしそうに振り返る。「子ども時代＝書道教室＝楽しいところ」の公式が自身の中で確立されているようだ。

そしてもう一つ、生き方に大きな影響を与えた出会いがある。高校時代の書道の先生だ。

「〝お習字〟を超えた書道の世界や表現を教えてくださって、『あなたはもっと伸びる』と励まされました。後にも先にも、あんなに『伸びる』と言われ続けた経験はありません。おかげで書道以外のことにも挑戦できたし、そうやって子どもは伸びるんだなと思います」

先生の助言で他校の書道専門コースに参加するなど書道に没頭したが、一方でその頃、同級生からいじめを受けていた。教科書を破かれたり、体操着をぐちゃぐちゃにされたりしたが、大好きな祖母の「悪いことをしてないなら堂々としていればいい」という言葉を胸に学校に通い続けた。

書道に夢中だった高校時代の川﨑さん（左）。両親と作品と一緒に

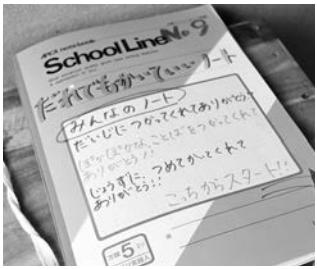
話すことが支えになる

社会人になってからも書道教室に通い続け、20歳を過ぎてからは、先生が用事で教室に来られない日には代理を務めるまでになった。23歳でいったん教室を離れ、結婚、出産、子育てと、日々は慌ただしく過ぎていった。

そんな中、川﨑さん一家を思いも寄らぬ悲しみが襲う。第2子出産予定日2日前のこと。赤ちゃんがお腹の中で亡くなっていることが分かったのだ。前日も健診を受けていたので、まさに晴天の霹靂だった。

緊急手術を受けた川﨑さんを、さらなる試練が待ち受けていた。出産しておらず働いてもいないということで、当時2歳半だった息子が保育園を退園しなければならないと告げられたのだ。

「赤ちゃんがいないので出生時育児休業給付金を受け取れないということも分かって、いろいろなものから見放された気がしました」



「だれでもかいていいノート」にはみんなの思いやかわいい絵が。子どもも大人もたくさん書いて、もう９冊目になった

痛むお腹の傷と深い心の傷を抱えたまま、息子の退園は避けたいと再び働き始めたが、そこで意外なことも分かった。

「同じような経験をしている人が周りにけっこういたんです。私から話すことで、相手も話してくれました」

〝話すこと〟は自身の支えにもなり、人とのつながりが地域の中で広がっていった。今、ぽかぽかに大人も来てもらえるようにしているのは、そのときの「大人だって話しに行ける場が必要」という気づきがあったからだ。

正式に書道教室を始めるときに借りた民家が老朽化して使えなくなり、地域の人が「うちのおばあちゃんが使っていたこの家、もう使わないから何でも自由に使って」と声をかけてくれて、ぽかぽかは今の場所に移転。床が抜けていたところは、地域の高齢者が「寄ってたかって直してくれた」し、伸び放題だった竹林を整備してくれたのも地域の人たちだ。

こうしてぽかぽかは、みんなが何となく気にかけ、集まってくる場に育った。

秀吉公ゆかりの唐津では茶道が盛ん。ぽかぽかでも子どもたちに人気だ

〝自叙伝〟上巻は山あり谷ありだったけど

実は、高校時代のいじめのエピソードには後日談がある。川﨑さんが自分を貫いて通学していると、徐々に周りの同級生が話をしてくれるようになった。3年生になる頃にはその子たちから「生徒会長になってほしい」と推され、選挙で勝ち、女子生徒初の生徒会長になった。

「あれをやりたい、これをやりたいと行事を企画して、予算獲得法なども考えて生徒会のメンバーと実行していく日々は楽しかったですね」

ちなみに、「子どもたちみんな、お前に怒られてばっかりなのに、よく懲りずに来るよなぁ」と笑う夫は3歳年上で、元職場の同僚だ。付き合い始めてから、同じ高校出身でしかも2人とも生徒会長だったことが判明したそうだ。毎年お盆には、夫の祖母直伝のおはぎを作り、同じように親戚に振る舞う。「そういうの大事にしたいなぁ、って」と教えてくれた。

「私、思うんですよね。つらいこと、悲しいこともあったけど、周りに恵まれていたなと。行くところ行くところ、ターニングポイントで支えになってくれる人たちとの出会いがありました」としみじみ話す。今では、一人親支援の活動をしている人や子ども食堂を運営している人など、活動への思いを共有する同世代の仲間もできた。

同級生から、こう言われたことがあるそうだ。「自叙伝を上下巻で出したら絶対売れるけん。それくらいあんたの人生面白かとよ！」

下巻が始まるのはまだ早いかもしれないが、どんな自叙伝になるのかは、今から楽しみでもある。

心が動いた住民と、支援するSC
島に広がるふれあい・支え合い活動

新潟県佐渡市の取り組み

日本海側最大の島、佐渡。島内で数度の合併を経て島全体が佐渡市となり、「佐渡島の金山」は世界遺産として知られています。山地や平野、海岸線、多様な文化背景を持つことから〝日本の縮図〟といわれるこの美しい島にも、人口減少と高齢化の波が押し寄せています。住民勉強会等を経て意識が高まり、活発に動き出した住民の活動を取材しました。

（取材・文／境　朗子）

みんなの〝手〟でつくる居場所「サロン家T・E」

佐渡島と本州（新潟）を結ぶ両津港を擁する両津地区。ここに今年4月、島で初めて住民の手による常設の居場所「サロン家（さろんや）T・E（て）」がオープンした。月～金曜日、学校帰りの子どもから近隣に住む親子、高齢者まで誰もが気軽に立ち寄り、自由に過ごす。

上條さん夫妻。サロン家T・Eの前で

レトロな佇まいの民家の引き戸を開けると、2間続きの和室。ここを開いたのは昨年4月に島外から移住してき

くつろげる空間は古民家ならでは

た上條孝明さん（59歳）・英子さん（59歳）夫妻。孝明さんは新潟県本土で郵便局に勤務していたが、過去の異動で3年間暮らした佐渡で子ども食堂をやりたいと思った。市や市社会福祉協議会などに相談しながら情報収集し、当財団と地域の茶の間創設者の河田珪子さん（新潟市）が協力した2022年度からの県のアドバイザー派遣事業による住民勉強会や意見交換会にも参加する中、「今、一番求められているのは誰でも好きなときに行ける居場所だ」と考えるようになった。移住するなら気力体力が十分ある定年前にと早期退職し、居場所にするため古民家を購入して改装に取りかかった。生活支援コーディネーター（SC）や市社協の伴走は心強かった。「ちょうど地元で祭りがあって獅子舞が各家庭をまわるので、一緒にあいさつまわりをしませんか」と提案をもらった。

「あいさつしてまわると、皆さん『好きにやっていいよ』と。うれしかったですね」と孝明さん。

改装中も地域の人たちがいつの間にか作業に加わったり、囲碁将棋盤などを寄付してくれたりした。「昔ながらの障子ってやっぱりいいねぇ」と懐かしそうに言われ、障子を壁にするのをやめて昔ながらのものは生かそうと方針転換。今ではみんなに「おばあちゃんの家みたいで落ち着く」と喜ばれている。

近くの学校に通う中高生たちが家族の送迎を待つ間、道端で過ごす姿を目にし、孝明さんは関係機関の協力を得て学校の教頭と面談。生徒と保護者へのアンケート調査を実施して「居場所があるといい」との多数の回答を得た。今は、放課後になると「こんにちは」「来たよー」と生徒たちの元気な声が玄関に響く。居合わせた高齢者に将棋を教えてもらった子もいるそうだ。

英子さんは「居場所は私たちの思いだけではできません。いろいろな人や団体ともつながって、意見交換しながら一緒により暮らしやすい地域にしていくのは楽しいです」と話す。孝明さんも「サロン家T・Eの『T・E』は私と妻の名前の頭文字から取りましたが、『地域みんなの〝手〟で運営しましょう』という意味も込められているんですよ」と教えてくれた。

「上條さんは勉強会に何度も足を運んだ意欲満々な方です。我々も精いっぱ

いサポートをしようと張り切りました」と話すのは、地区担当第2層SCの今山紀行さんと大塚肇さんだ。開設者の思いを受けて柔軟な後方支援を行っている。

行けばほっとする SCもいる居場所「ほっとてらす」

佐渡市の人口は1950年頃の約12万人をピークに、現在4万8000人ほど。高齢化率は43%だ。2016年から生活支援体制整備事業を開始し、現在SCは第1層が2名、第2層が6名と、計8名体制だ。

一昨年度まで第1層SCだった津山春香さんは「途中SCの交代などもあり、事業がなかなか動きませんでした。でも3年前から勉強会を重ね、住民や関係者が認識や理解を深めて、意欲ある住民の掘り起こしや企業連携も進んできました」と振り返る。「佐渡は地縁血縁関係が強いので、良い面もある一方で第三者にあまり助けを求めません。それだけに、勉強会で河田さんがおっしゃった『居場所は第三者に〝助けて〟と言えるつながりをつくるところ』という言葉は多くの参加者に刺さったようです」

現在の第1層SC、高野康栄さんは「市からは、住民の要望を汲んで市の中心地に常設の居場所を立ち上げてほしい、と話がありました。そこにSCが常駐し、住民活動の拠点となることを目指しています」と話す。候補地として白羽の矢が立ったのが、佐和田地区の河原田商店街。同地区は島の中央西部に位置し、かつては経済の中心地だった。

空き店舗を利用した常設の居場所「ほっとてらす」は今年1月オープン。月～金曜日に開所していてSCの高野さんと村田舞子さん（第1層SC）が常駐し、住民が自由に出入りして思い思いに過ごす場だ。この空き店舗のオーナー関口圭一さん（72歳）は、「話をもらったときは、そんな活用方法があるのかと驚きましたが、今や地域の

常設の居場所「ほっとてらす」

大事な場になっているようで応援したい。私もよく顔を出しますよ」と快活に話す。

高野さんと村田さんは「何かあったら行けば、いつも誰かがいてほっとでき、気軽に〝ごちゃまぜ〟の交流ができる場であってほしい。ここをモデルとして他地区にも広げていきたい」と意気込みを語る。

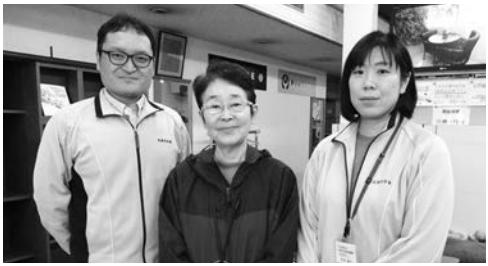
「ほっとてらす」の運営サポーターで佐和田地区の民生委員でもある関川聖子さん（70歳）は、「一度島外で暮らして、戻ってきたらあんなに活気のあった商店街が寂しくなっていた」と嘆く。「私自身、一人暮らしになったので居場所が欲しくて島内のサロンを見てまわったり勉強会に出たりしていたら、こんな自由な居場所がオープンすることになって期待が膨らみました。年を取るとできることが減ると諦めがちですが、実は逆だと分かりました。面白いことが待っていますね」

この日来ていた小学4年生は「お父さんもお母さんも仕事があるので、今まで学校が終わると家で一人でした。ここはいろんな友だちと遊べて楽しいし、宿題もできる」とうれしそう。迎えに来たお母さんも「安心して子どもを通わせられます。高齢の方との交流があるのもいい」と話した。

かつて衣料品店を営んでいた廣瀬擁（まもる）さん（82歳）は、「このあたりは商人の町だから、一匹狼的な性格の人が多くて協働が苦手な面もある。でもこれからは一人暮らし高齢者がますます増えるから、こういう場は絶対必要。実は、ほっとてらすの名付け親はうちの家内なんですよ」と笑顔で教えてくれた。

ほっとてらすに
よく来る廣瀬さん

運営サポーターの
関川さん


左から、髙野さん、津山さん、村田さん

ふれあいのための移動販売「小倉トーク会」

島のほぼ中央、畑野地区の自然豊かな山あいにある小倉集落センターに毎週金曜日の午後、移動販売車「うえたん号」が来る。近くの家から坂道をゆっくりと手押し車を押して登ってくる人、軽トラックでさっそうと現れる人

など住民も集まってきた。販売員2人は品出しをしながら、地区担当第2層SCの服部綾子さんと一緒に「お元気でしたか?」と声をかける。うえたん号を待つ間、そして買い物の後、集落センター玄関の上がり框にみんなで座っておしゃべりに花を咲かせるひとときは、地元住民の暮らしに安心とあたたかみを添える大切な定例イベント。手を振って住民を迎える民生委員の中村美幸さんは「靴を脱いで上がるのがきつい方もいるから、玄関を会場にしています」と教えてくれた。

「ブヨに刺されてね」。1人の女性が腫れた腕を押さえて言うと、「それは困った。どれどれ」とみんなの心配そうな視線が集中。それぞれの経験談や対処法の話で持ちきりになる。

全国各地で移動販売を展開するドラッグストアチェーンのウエルシア薬局と佐渡市が「支え合いによる地域づくり等に関する連携協定」を締結したのは23年。住民同士の見守りや支え合いにつながることを期待されて、同年10月からうえたん号は運行を開始した。立ち寄り所は地域をよく知るSCが提案し、現在島内で95か所に及ぶ。その一つが小倉集落センター。移動販売が来てくれるようになったことをきっかけに、中村さんともう一人の民生委員・後藤美智子さんが「以前から考えていた

～勉強会参加から意気投合　看護師たちの活動立ち上げ～

今年、看護師による地域活動がスタートした。看護師として働く中で、コミュニティづくりへの思いを募らせてきた２人だ。住む地域は離れているが、アドバイザー派遣事業の勉強会で初めて会い、その後ＳＣの働きかけで保健師なども交えて会合を持ち意気投合した。

病院に勤務した後、定年退職した相川地区の坂野かつえさんは「家族の介護を抱え込み、『助けて』とも言えず疲れ切っている人たちを見て、医療職の私たちも何かできないかと考えていた」と語る。今は、地元のウエルシア薬局店内で「小さな保健室」を月１回開催し、住民の相談に乗っている。

小木地区の大久保友美さんは「以前、学校看護師として医療的ケアが必要な子たちのサポートをしていて、制度だけではない支援方法を模索していた」と話し、現在は障がい者施設に勤務する傍らコミュニティスペースを運営している。

坂野さん

大久保さん

２人は有償ボランティア「ナースまごのて佐渡」を立ち上げた。生活に身近な存在として、在宅での介護や外出支援、傾聴などを幅広く提供。最近、助産師も新たに１人参加し、医療専門職の仲間を増やして島全域での活動を目指す。

移動販売とその前後に開かれる「小倉トーク会」の様子。
集合写真左は民生委員の後藤さん、その右は中村さん

交流の場をこの機会に立ち上げたい」と声を上げ、SCが支援してこの「小倉トーク会」が誕生した。

「一人暮らしなので何日も人と話さないこともあったけど、金曜日は買い物はできるし、誰かが必ずいて地域のことも教えてもらえます。いつも楽しみです」と80代の女性。参加者は毎回7～10人で、半数ほどが一人暮らしだそうだ。

中村さんは「個別の家庭訪問に加えて、ここで皆さんと話すとよりきめ細かい情報がいただけます。お互いを気にかける様子を見ると私もほっとします」と話す。

当初、開催は12月までとしていたが、参加者から「雪の季節もおしゃべりしたい」との強い要望が出てトーク会の継続が決まった。

うえたん号販売員の学之基（がくのもとい）さんは何と、この仕事に魅力を感じて転職したそうだ。「はつらつと暮らしている大先輩のお客様から元気をいただいています」。同じく販売員の西原陽子さんも「地域のコミュニティづくりに携われることにやりがいを感じます。私も佐渡でこの仕事がしたくて沖縄から移住してきました」と楽しそうだ。

買い物に出て自分で商品を選んでお金を払い、販売員とも言葉を交わすことは、一人ひとりの尊厳を維持して介護予防にもなるだろう。

＊　＊　＊

SCの皆さんは、住民が主体となる生活支援体制整備事業にどう取り組むか、最初は雲をつかむような感じもあったと振り返る。しかし、勉強会等を通じて住民が自分事として地域づくりに取り組もうとする機運が高まるのを見て、手応えを感じたという。今回取材した以外にも活動が次々と立ち上がってきた佐渡市。今後の広がりを楽しみにしたい。

時間をかけて動き出した住民たち

さわやか福祉財団常務理事・共生社会推進リーダー　**鶴山 芳子**

「佐渡も変わってきたね」。アドバイザー派遣事業で佐渡市を一緒に支援した河田珪子さんとそんな話をした。今年３月、３年間の支援のまとめとなる勉強会の際、一昨年度までＳＣだった津山さんは「面として広がってきた」と手応えを実感していた。会場では、創出された居場所や有償ボランティア等のパネル展が開かれ、島内から集まった参加者が質問する姿があり活気に満ちていた。勉強会で意気投合した住民たちが各地で活動を始めるなど、意欲も増している。しがらみが強い地域性もある中、移住者らが活動を立ち上げ新しい風を入れ、企業連携では移動販売をきっかけとした居場所づくりをＳＣらが仕掛けている。支援当初には想像できなかった変化を感じる。

４年前、第１層協議体の全体会（企業や団体約60名の大所帯）で、「ＳＣと協議体の役割」を伝える機会をいただいた。アンケートには「住民主体の地域づくりには仕掛けが重要」との感想もあり、住民への働きかけが始まった。翌年、ＳＣや行政職員らは「広い島内におけるニーズや担い手の掘り起こしが難しい」という課題を共有。まずは「住民に広く周知」、次に「具体的な手法を学ぶ」、そして「実践へ」と、戦略を立てて動き出した。河田さんからは、市民フォーラムでの動機付けや居場所づくりに向けて実践に基づいた具体的なノウハウを伝授。支え合いの必要性を伝える勉強会では住民たちの意見交換で共感を広げた。「もっと学びたい」と心が動いた住民に第２層ＳＣらが支援を重ねた。

「アドバイザーから、参加者の意欲喚起や豊富な事例紹介をいただけた。勉強会から活動を実践する住民が現れたのは大きな成果で、企業とも連携できた。今後は、若い世代や高齢男性への呼びかけに注力し、支え合い活動の裾野を広げていきたい」と、ＳＣの髙野さんと村田さん。住民たちにやらされ感はない。自分事として動き出した人たちを核としながら、次の仕掛けが動き始めている。

＜サロン家Ｔ・Ｅ＞　開設：月～金 10時30分～18時30分
利用料：子ども100円・大人200円
※子ども月額1,000円券あり

＜ほっとてらす＞　開設：月～金10～19時　利用料無料
※飲み物を利用する場合、高校生以上は100円程度の協力金をお願いしている

＜小倉トーク会＞　金曜日14時15分頃からの移動販売前後に集落センター玄関にて

●**連絡先／電話　0259-67-7828（ほっとてらす・生活支援コーディネーター）**

『いつでも誰でも行ける場所を広げよう！ 居場所ガイドブック』

ぜひご活用ください！

「いつ行ってもいい、誰が行ってもいい、何をしてもいい」共生型常設型の居場所を地域に広めましょう。自分らしく過ごせる場所がある安心感、また、地域の絆をより深め、助け合う関係を広げるための居場所づくりのノウハウと事例が盛りだくさんです。

【目 次】

1章　居場所ってなに？

2章　居場所のつくり方
- 1 ひ　と　思いを持った人を中心に仲間を広げていく
- 2 も　の　拠点となる場所や物品
- 3 おかね　立ち上げ資金や運営費用
- 4 情　報　周知・PR
- 5 運営のコツ

3章　居場所の事例（21事例）
- 1 基幹型
- 2 交流型
- 3 イベント型
- 4 食事会型、「子ども食堂」
- 5 その他

4章　活動に対する支援のあり方
民間による支援／行政による支援／補助金・助成金以外の行政の支援

5章「新しい総合事業」（通いの場）の活用

お問い合わせは当財団まで　（03）5470-7751

本書のPDFは、当財団のホームページからダウンロードもできます。
勉強会など大人数での使用にどうぞご利用ください。
https://www.sawayakazaidan.or.jp/public-relation-tool/

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、生活支援有償ボランティア、不登校児の保護者サポート、多様性尊重の取り組み等の活動を紹介します。なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

埼玉県上里町

有償ボランティアで高齢者のちょっとした困り事を解決！

三町高齢者等生活支援の会

助成金額　13万円

上里町大字三町地区（約550世帯）の高齢者等を対象に、ちょっとした生活の困り事を地域住民の有償ボランティアで支援するため、「三町高齢者等生活支援の会」は昨年4月に発足しました。

立ち上げについては、区長や民生委員などと会合を重ね、町社会福祉協議会所属SCから組織のつくり方、活動内容、会則など具体的な指導を受けたことで比較的スムーズに立ち上げることが

有償ボランティアによる作業の様子

できました。

活動は、専門的な技術を必要としない、かつ危険を伴わない軽作業（庭の草取り、低木の手入れ、買い物代行、ごみ出し等）を30分200円で行います。活動には各種団体へも協力を依頼し、さらに全戸にパンフレットを配布することで地域への周知を図りました。

今回の助成金は、立ち上げ時に必要な作業工具類、事務用品、専用の帽子等の購入、ボランティア保険料などに活用し、現在までに男性9名、女性3名が協力会員として登録しています。

発足半年で庭の草取りなどの依頼を受けましたが、地域の特徴として庭が広い家が多く、依頼者はすべて一人暮らし高齢者とのこと。依頼者から感謝の言葉をもらうと団体を立ち上げて本当によかったと感じています。今後は他の3地区へ働きかけ、さらに広い範囲を対象として運営していきたい、と頼もしい報告をいただきました。

はーとくらぶの勉強会の様子

大阪府柏原市

不登校児の保護者に学びと心のサポートを提供

不登校親の会　はーとくらぶ

助成金額　14万9000円

2020年より月1回、子育て中の保護者のための傾聴座談会を開催してきた中で、コロナ禍を経て多い相談が「不登校、登校しぶり」についてでした。そこで、既存団体でのお互いの話を聞く活動にとどまらず、心理的な学びを含めた保護者へのアプローチやサポートができる場所をつくろうと、昨年1月に「不登校親の会はーとくらぶ」は発足しました。

今回の助成金は、宣伝のためのチラシやポスター作成、会場費、講習会の講師への謝礼金、お茶・お菓子代等に活用。ポスターは市役所や教育委員会の協力で市内の全小中学校、図書館、体育館などに掲示してもらうことができ、SCとの連携によって地域の高齢者にサポートを呼

びかけました。

日曜日の開催時には子どもも参加ＯＫとし、開催場所である学童保育のスタッフが子どもたちの見守りをしてくれたり、終了後に学童保育が運営する食堂に参加者数名がそのまま移動して楽しそうに食事をして帰る様子などが見られたということです。

日頃大変な思いをしている不登校児の保護者がここでほっとして、家庭に戻ってから子どもとより良いコミュニケーションが取れるように、また、子どもの不登校により孤立する保護者を地域からなくし、子育てしやすいまちづくりができるようにしたい、と報告をいただきました。

長崎県長崎市

支援を受けにくい人たちに一人でも多く集まってほしい

つながる長崎

助成金額　15万円

子育て応援と、障がいを持つ人が地域の中で自然に受け入れられることを目的として2023年から活動している「つながる長崎」。対象者を絞らずに食支援を行うことで、制度の狭間にいる家庭や物価高騰の影響が大きい家庭にも気持ちよく支援を受けてもらえるように。また、複数の障害者就労支援事業所の利用者に準備から子どもとふれ合うところまで担ってもらい、地域での自分の役割を感じ、やりがいを持って活躍してもらえる場所となるようにと、子ども食堂とフードパントリーを実施することとしました。今回の助成金

たくさんの来場者でにぎわう子ども食堂の様子

は、そのための支援物資購入やチラシコピー代等に活用されました。

春休みの子ども食堂開催当日は150人前後の来場者があり、市役所のレストランを会場にしたことで誰もが安心して集まれる場になったとのこと。また、地域の飲食店に食事作りを担ってもらうなど協力者も増え、地域住民が持てる力を出し合い、つながりが想像以上に加速したということです。

障がいを持つ人が、いつもの事業所ではない場所で地域の人たちと直接ふれ合い楽しんでいる様子が見られたそうで、「今後も活動を続け、多くの事業所と関わって障がい者の活躍の場を広げていきたい」と報告をいただきました。

「地域助け合い基金」状況のご報告

（5月15日　当財団ホームページ開示時点）

◎寄付受付額

430件　2億906万7637円

このうち遺贈基金より1億7000万円を供出

◎助成実行額

1292件　1億9718万4139円

「堀田力さんを偲び　ふれあい社会を語る会」では、本基金にたくさんのご寄付をいただきました。今後も当財団では、本基金の助成を通じて助け合いのある地域づくりに貢献してまいります。

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

クレジットカード決済ページ

財団ホームページ内基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金担当
電話：(03) 5470-7751
FAX：(03) 5470-7755
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

シリーズ

定年、その先へ

地域とのつながり方 ②

日本の定年制度の現状

一般社団法人定年後研究所所長
池口　武志

（いけぐち　たけし）１９８６年日本生命に入社。本部・現場で長く管理職を務め、多様な人材育成に関わる。２０２１年定年後研究所所長就任後は、シニア就労促進に関する企業取組、シニアの意識調査に従事。還暦で桜美林大学院老年学修士課程を修了。厚生労働省生涯現役社会の実現に向けた検討会委員、企業から福祉への人材供給に関する調査研究事業検討委員、早稲田大学キャリア・リカレント・カレッジ講師、シニア社会学会理事等を通じて、シニアの可能性の拡がりを志向。

先月号では自己紹介を兼ねて、筆者自身が、「会社と社宅を往復する」だけの会社人生から50代以降徐々に「地域社会への関心」を抱き始めた経緯や心境変化をお話ししました。かくいう筆者も年齢や入社年次が会社での昇進を決める実情を肌で感じてきましたし、就業規則に定める「定年」で会社を去っていく諸先輩の背中を見てきました。このシリーズのタイトルには「定年、その先へ」の文言がありますので、今月号では「日本の定年制度」の現状をご紹介します。

現在日本では、公的年金の支給開始時期に合わせて、高年齢者雇用安定法によって「65歳までの雇用義務」が全ての事業主に義務付けされています。この法律は罰則付きの法律ですので、日本ではほぼ１００％の企業が65歳までの雇用責任を果たしています。この責任を果たす形態として「定年制の廃止」「定年の65歳以降への引上げ」「継続雇用制度の導入」の３パターンから企業は選択できますが、定年

を廃止する企業は僅少で、定年の引上げが3割弱、残りの約7割が継続雇用制度の導入としています。

継続雇用制度の導入とは、60歳定年後は、1年更新の社員として65歳まで再雇用される制度のことです（その間の雇用形態は、正規雇用と非正規雇用とが約半々）。退職金は、60歳定年の企業は60歳での支給、65歳定年の企業は65歳での支給が一般的となっています。このように制度上は「60歳定年、その後65歳まで再雇用」と「65歳定年」の2つに分かれますが、7割を占める前者の場合でも、60歳定年後、自社内で再雇用を選択する社員の割合は9割程度となっており、日本では「65歳まで同じ会社で勤務する」のが多数派となっています。

また、2021年からは改正高年齢者雇用安定法が施行され、全ての企業に「70歳までの就業機会の確保」が努力義務として課されました。企業は「定年制の廃止」「定年の70歳以降への引上げ」「70歳までの継続雇用制度の導入」に加え、「70歳までの継続的な業務委託契約」「70歳までの社会貢献事業への従事」が新たな選択肢となりました。罰則規定のない努力義務であり、現在は、「70歳までの継続雇用制度」を中心に、3割超の会社がいずれかの措置を講じています。業務委託や社会貢献事業は、高齢期の働き方の多様化ニーズを念頭に置いて新設されましたが、残念ながら事例は聞き及びません。

以上が、日本の「定年制度」の現状ですが、大企業と中小企業ではその様相は異なっています。人手不足がより深刻な中小企業を中心に、65歳の定年や再雇用満了以降、経験・スキルが豊かな社員は、人事制度とは別に、個々に継続雇用されるケースが増えており、長く同じ会社で働き続ける割合は増加傾向にあります。地域社会へ関わる時期が遅くなる可能性もあるわけです。

次号では、50～60代会社員の「定年」に関するキャリア意識を見ていきます。昭和の終わりから平成の初期にかけて新卒入社した所謂「大量採用世代」が多くの会社で60歳の境界線を越えつつあり、当該層の価値観を押さえておくことが重要だからです。

6月27日(金)
幕張メッセ

日本老年学会総会と共催

シンポジウムに高連協共同代表として清水肇子理事長が登壇

さわやか福祉財団が事務局を務める高齢社会ＮＧＯ連携協議会（高連協／1998年設立・高齢社会への対応対策の推進を目的としたネットワーク団体）が、６月に千葉市・幕張メッセで開催される第34回日本老年学会総会において、下記の通り日本老年学会と共催で合同シンポジウムを行います。

高連協の共同代表である当財団の清水肇子理事長らが登壇し、地域とのつながりや社会実装をテーマに講演いたします。非学会員でも当財団経由でお申し込みが可能ですので、関心のある方はぜひご参加ください。

第34回日本老年学会総会

◆ **日 時：６月27日（金）～６月29日（日）**

◆ **場 所：幕張メッセ**（千葉県千葉市美浜区中瀬２-１）
ＪＲ京葉線「海浜幕張」駅から徒歩５分

合同シンポジウム
「エイジフレンドリーな地域共生社会に向けて」

● **合同シンポジウムは、６月27日（金）13:20～15:20**
幕張メッセ国際会議場２F［201会議室］で行われます。

登壇者 **駒村康平**（慶應義塾大学経済学部教授・ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター長）
荒井秀典（日本老年学会理事長）
福富昌城（日本老年学会副理事長）
狩野光伸（岡山大学副学長）
清水肇子（さわやか福祉財団理事長・高連協共同代表）
杉啓以子（ＮＰＯ法人日本世代間交流協会会長・高連協理事）　（敬称略）

※日本老年学会総会の詳細は下記ホームページからご確認ください。
高齢社会ＮＧＯ連携協議会ホームページ　https://www.janca-jp.com/

◆ **参加申込締切：６月20日（金）正午**

◆ **参加費：高連協参加団体経由でのお申し込みは無料**
詳しくは、下記担当へお問い合わせください。

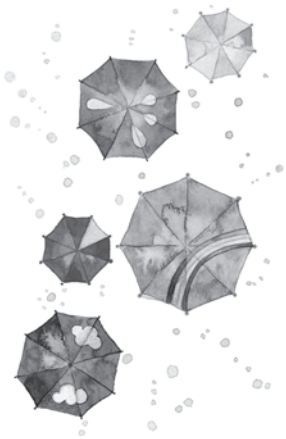
お問合せ
さわやか福祉財団社会参加推進チーム・高連協事務局　玉置
電　話（03）5470-7751
メール janca.jimu@sawayakazaidan.or.jp

新しい
ふれあい社会づくりに
向けて

ふれあい　いきがい　助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**
  さわやかパートナー（賛助会員）・
  ご寄付者の皆様のご紹介
- **NEWS＆にゅーす**
- **さわやか**活動日記（抄）



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

（敬称略）（2025年4月1日～5月1日財団受付分）※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますことをご了承ください。

さわやかパートナー個人（57件）

（都道府県別50音順）

宮城県
佐藤　かつよ
渡部　孝雄

福島県
阿部　洋子

栃木県
丹　直弘

群馬県
恩田　初男
小山　範之

埼玉県
小関　和夫
佐伯　昌子
酒井　勝男
中崎　朱美
中村　清子
森戸　伸行
渡辺　敬子

千葉県
烏山　美知子
小澤　利政
鈴木　章
原　武二郎
藤本　裕一郎

東京都
伊豆　幸美
稲川　寿子
木村　智都子
木村　大哲
清水　敦子
鈴木　慶子
鷹野　義量
田河　慶太
林　幹高
松尾　邦弘
宮部　敬子
吉岡　高志
和久井　良一

神奈川県
岡本　淳
小野　昭男
恩田　實
佐野　圭子
佐野　美樹子
白岩　正明
角井　佑子
平野　潤一

富山県
棚田　美智代

福井県
天谷　まり子

岐阜県
榎本　豊

愛知県
齋藤　みどり
瀬川　正俊
関戸　進

三重県
西村　美紀子

京都府
北村　哲也

奈良県
藤　一男

岡山県
岡崎　利治

広島県
濱崎　雄司
渡邊　ユミ

徳島県
新居　政昭

福岡県
潮　ハルミ
佐藤　須美子

長崎県
古賀　秀隆

大分県
高木　佳奈枝

宮崎県
太平洋工業株式会社
NPO法人
日産労連NPOセンター「ゆうらいふ21」
NPO法人福祉バンク大館
株式会社堀場製作所

さわやかパートナー法人（6件）

（50音順）

NPO法人青葉台さわやかネットワーク
医療法人社団潤康会芝パーククリニック

一般ご寄付（1件）

清水　肇子（50万円）

地域助け合い基金ご寄付（178件）

（原則50音順）

青木　孝弘（5千円）
秋山　正子（1万円）
秋山　陽子（3万円）
荒井　智子（2万円）
新井　文男（5千円）

飯久保　寛幸（1万円）
五十嵐　美代子（1万円）
伊藤　達博（3千円）
伊藤　もと子（1万円）
岩川　徹（3万円）
牛田　晋（1万円）
内田　友昭（1万円）
宇野　均惠（2万円）
江口　陽介（3万円）
遠藤　英嗣（2万円）
大石　芳野（2万円）
大島　桂子（1万円）
太田　達男（2万円）
大貫　正男（1万円）
NPO法人
大船渡共生まちづくりの会
（3万円）
大和　修（2万円）
岡添　ナオ子（1万円）
岡野　光利（2万円）
小川　泰子（1万円）
小川　裕美子（1万円）
奥山　俊一（1万円）
尾崎　雄（1万円）
小田　和夫・幸子（1万円）

小野島　朝子（5千円）
小野寺　寛（5千円）
恩田　初男（2万円）
鍵政　弘子（1万円）
株式会社カスタネット（5万円）
NPO法人
加世田じゃがいもの会（5千円）
加藤　由紀子（5万円）
加藤　洋一（1万円）
角川　克己（1万円）
紙谷　伸子（1万円）
蒲原　基道（1万円）
川井　信義（1万円）
河合　峯（1万円）
河崎　民子（5千円）
河田　珪子（1万円）
菊池　ゆかり（1万5000円）
岸本　幸子（1万円）
木下　清（1万円）
木原　仁（1万円）
桑山　信子（1万円）
NPO法人ケア・ハンズ（5千円）
一般財団法人
健康・生きがい開発財団（1万円）

公益財団法人
公益法人協会（1万円）
國生　美南子（3万円）
在宅支援サービスさわやか港南
（1万円）
齋藤　鈴子（5千円）
斉藤　節子（1万円）
佐伯　知美（3千円）
佐伯　正孝（1万円）
佐伯　美穂英（1万円）
酒井　やよい（3万円）
佐生　綾子（1万円）
佐藤　敬子（1万円）
澤出　桃姫子（3万円）
NPO法人
さわやかさばえ
ボランティア虹（1万円）
NPO法人
サンアンドムーン（5千円）
三遊亭　竜楽（2万円）
公益財団法人JKA（1万円）
嶋野　道弘（1万円）
島村　孝一（1万円）
島村　八重子（1万円）
清水　敦子（5万円）
清水　肇子（10万円）

NPO法人
市民助け合いネット（2万円）
認定NPO法人
じゃんけんぽん（1万円）
一般社団法人
全国食支援活動協力会（1万円）
一般社団法人
全国信用金庫協会（3万円）
菅谷　雄一（1万円）
杉山　雅彦（5千円）
鈴木　明与（3万円）
鈴木　勝治（5万円）
鈴木　広幸（3千円）
鈴木　文雄（1万円）
関彰商事株式会社（3万円）
脊古　光子（1万円）
平　雅久（1万円）
高井　芳子（3千円）
高橋　恵理（1万円）
髙橋　大吾（1万円）
髙橋　寛人（5万円）
高山　武明（5千円）
たすけあい川本（1万円）
NPO法人
たすけあい平田（2万円）
多田　直彦（1万円）

谷　仙一郎（1万円）
丹澤　泰夫（1万円）
塚田　進一（1万円）
辻村　哲夫（1万円）
土山　剛・恭子（1万円）
鶴山　芳子（5万円）
税理士法人
出塚会計事務所（5万円）
寺嶋　知子（5千円）
徳間　康晋（1万円）
戸田　公明（1万円）
栃木県
さわやかインストラクター一同
（5万円）
富田　心（1万円）
冨永　泰子（5千円）
度山　徹（1万円）
中込　純（5千円）
中﨑　朱美（1万円）
永島　崇子（3千円）
中戸　幹郎（1万円）
中村　清子（1万円）
中村　順子（1万円）
NPO法人
流山ユー・アイネット（3万円）

日本印刷株式会社（10万円）
公益社団法人
日本介護福祉士会（1万円）
公益社団法人
日本フィランソロピー協会
（3万円）
公益社団法人
日本プロサッカーリーグ（5万円）
野坂　一弥（1万円）
野尻　史子（1万円）
野見山　國光（5千円）
野村　浩子（1万円）
NPO法人ハートフル（1万円）
服部　恵津子（5万円）
服部　安子（1万円）
花崎　良政（5千円）
早川　仁（2万円）
早瀬　昇（1万円）
原　勝則（2万円）
NPO法人びーのびーの（1万円）
比嘉　政浩（1万円）
平川　純子（1万円）
広瀬　貢（3千円）
深町　聖子（1万円）
福江　孝夫（5千円）

福沢　千恵子（3万円）
富士急行株式会社（3万円）
古川　幸子（1万円）
保坂　雅宣（1万円）
星野　和彦（1万円）
ボランティア・ベンダー協会
（3万円）
本間　郁子（1万円）
NPO法人
まごころサービス福島センター
（2万円）
松岡　紀雄（3万円）
松岡　洋子（1万円）
松原　紘・敬子（1万円）
丸藤　競（1万円）
丸山　式子（5万円）
水沢　芳夫（1万円）
三原の郷未来塾（1万円）
三宅　実・幸恵（1万円）
宮沢　邦子（5千円）
向井　美代子（1万円）
村田　幸子（10万円）
安原　俊夫（3万円）
柳　久美子（1万円）
矢野　薫（5千円）

山田　健一郎（3万円）
山本　千恵（1万円）
吉田　旭雄（1万円）
和久井　良一（2万円）
渡辺　恵司（3万円）
渡邊　典子（1万円）
渡辺　由美子（5千円）
匿名希望（5万円）
匿名希望（5万円）
匿名希望（5万円）
匿名希望（5万円）
匿名希望（3万円）
匿名希望（1万円）
匿名希望（1万円）
匿名希望（1万円）
匿名希望（1万円）
匿名希望（1万円）
匿名希望（1万円）
匿名希望（1万円）
匿名希望（3千円）
「堀田力さんを偲び
ふれあい社会を語る会」募金箱
（4万5800円）

さわやか福祉財団

NEWS & にゅーす

「堀田力さんを偲び ふれあい社会を語る会」とご寄付のご報告

さわやかな春の陽差しに恵まれた4月25日、東京都港区芝公園の増上寺光摂殿にて「堀田力さんを偲び　ふれあい社会を語る会」を開催し、全国からご多忙の中400名ほどの皆様がご参会くださいました。

会場には、故堀田力前会長が好きだった紫色を基調とした花々の祭壇、生前好んで聴いていた曲などの弦楽四重奏とともに、堀田さんの言葉と写真を大きなボードで展示。ロビーには堀田さんと当財団の歩みをまとめた年表や、寄せ書きコーナーも設けました。

会は2部構成で、第1部では思い出の映像を上映した後、堀田さんとご縁の深かった方々に「ふれあいリレーメッセージ」を披露していただきました。堀田さんとの出会いや、さわやか福祉推進センター（現・当財団）設立時のことなどが語られ、会場には共感と追憶の空気が広がりました。

第2部は自由献花としました。また、別室では展示した思い出の品々を眺めながら参会者の皆様が笑顔で語り合う様子が見られました。

この会を通じて、募金箱へのご寄付と合わせて総額31万1800円のご寄付を賜りました。あたたかいご支援をお寄せくださいました皆様に心より御礼申し上げます。

当財団では、支援の届きにくい方々に必要な支援が届くように、そして、地域のふれあい・助け合いが深まることを目指して「地域助け合い基金」を設けています。今回いただいたご寄付はすべてこの基金に組み入れ、全国各地の助け合い活動の支援に活用させていただきます。

今後も当財団は、「新しいふれあい社会の実現」に向けて全力で取り組んでまいります。あらためまして、皆様のご厚情に心から感謝申し上げ、ご報告とさせていただきます。

（大石　敏晴）

～あたたかなお心遣い、誠にありがとうございました～

（敬称略・順不同）

◆「ふれあいリレーメッセージ」をご披露いただいた皆様

川淵三郎（Jリーグ初代チェアマン、日本サッカー協会相談役）
大竹美喜（アメリカンファミリー生命保険日本支社設立者）
松岡紀雄（神奈川大学名誉教授）
中村秀一（一般社団法人医療介護福祉政策研究フォーラム理事長、国際医療福祉大学大学院教授）
村木厚子（社会福祉法人全国社会福祉協議会、公益財団法人全国老人クラブ連合会、社会福祉法人中央共同募金会各会長）
中村裕二（NPO法人葬送の自由をすすめる会会長、弁護士）
中村順子（認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸理事長）
加藤由紀子（NPO法人ふれあい天童理事長）

◆生花をいただいた皆様

アメリカンファミリー生命保険
日本支社設立者　大竹美喜
公益財団法人公益法人協会
NPO法人高齢社会をよくする女性の会
理事長　木村民子
坂口郁子
公益財団法人JKA　会長　木戸寛
清水勇男　清水路子
公益財団法人住友生命健康財団
理事長　平井克典
一般財団法人住友生命福祉文化財団
理事長　藤山勝伸
公益社団法人成年後見センター・リーガルサポート　理事長　高橋隆晋
社会福祉法人全国社会福祉協議会
会長　村木厚子
一般社団法人全国レガシーギフト協会
共同代表　山北洋二　樽本哲
竹下知道
社会福祉法人中央共同募金会
会長　村木厚子
公益財団法人長寿科学振興財団
会長　渡辺捷昭　理事長　大島伸一
土山恭子
株式会社テレビ朝日
代表取締役会長　早河洋
株式会社テレビ朝日　放送番組審議会事務局
東海ブロックインストラクター
愛知・岐阜・長野・三重
東京海上ホールディングス株式会社
取締役会長　永野毅
東京海上日動火災保険株式会社
取締役社長　城田宏明
東京都知事
栃木県職員
山田智子・佐藤美紀・渡邉友紀・岡本優子
新潟市長　中原八一
特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ　会長　野中孝泰
にっぽん・子ども子育て応援団有志一同
日本印刷株式会社
代表取締役社長　熊谷聖一
公益財団法人日本サッカー協会
相談役　川淵三郎
特定非営利活動人日本ファンドレイジング協会　代表理事　鵜尾雅隆

公益社団法人日本フィランソロピー協会
理事長　髙橋陽子
公益社団法人日本プロサッカーリーグ
チェアマン　野々村芳和
株式会社八洋　代表取締役社長　後藤晃宏
樋口恵子
富士急行株式会社　取締役社長　堀内光一郎
ボランティア・ベンダー協会
総務大臣　村上誠一郎
社会福祉法人リガーレ暮らしの架け橋
理事長　山田尋志

◆弔電をいただいた皆様

総務大臣　村上誠一郎
衆議院外務委員長　堀内詔子
総務審議官　横田信孝
東京都知事　小池百合子
北海道夕張郡栗山町長　佐々木学
鳴門市長　泉理彦
古賀市長　田辺一城
社会福祉法人全国社会福祉協議会
会長　村木厚子
平田どうもの会　会長　阿部富雄

「堀田力さんを偲び　ふれあい社会を語る会」の様子

さわやか活動日記（抄）

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC＝生活支援コーディネーター

column

住民だからできること、住民たちの力

さわやか福祉財団常務理事・共生社会推進リーダー　鶴山　芳子

地域で共に暮らす人だから

私が出席しているある委員会で、「居場所に来られない人たちに来てもらうにはどうするか」ということが課題になっていた。地域でもよく耳にする話題である。どの地域でも通いの場やサロンをはじめさまざまな居場所が広がっているが、元気な人たちが集っており、引きこもりがちな人など〝出てきてほしい人〟の参加につながっていないことが多い。ハイリスクな人をどう引っ張り出すかが課題なのだ。

一方で、住民が主体的に取り組んでいる共生の居場所には認知症の人、引きこもりがちな人、障がいがある人、外国人など多様な人たちが自然に集っており、まさに「ごちゃまぜ」である。どのようにして参加につながっているのか、ある居場所の取り組みから考えてみたい。

その居場所は子どもから高齢者まで誰もが参加する共生の居場所で、引きこもりだった人たちの中には就労を希望する人もいて、自主製品作業として煎餅の製造と袋入れ等の仕事も生み出している。

引きこもっていた人たちがどのようにして居場所に来るようになったのか。代表者に聞くと、あるとき居場所に参加している住民の間で「近所に引きこもっている人がいる」「私の近所にもいて、気になっている」という話になった。そこで代表者が「おいしいご飯をみんなで食べようよ、と声をかけてみて」と伝えた。すると、そういった〝気になっている〟人たちも、次第に参加している住民と一緒にその居場所に来るようになったそうだ。

誰でも、困ることや不安になることはある。「支援する人」でなく、お互いに地域で共に暮らす同じ立場

の人だからこそ、次第に心を開く関係が育まれるのではないだろうか。

役に立てる場所は行きたい場所

冒頭に述べた委員会では「引きこもりがちな方や地域とのコミュニケーションに課題を持つ方など居場所に通えない方に対するアプローチについても考え、地域の実態把握を進めることが重要」との議論がなされたが、住民の力を生かすのもアプローチの一つとして有効ではないか。

前述の居場所では「生きがいの場づくり」としてコーヒー焙煎、野菜作り、歯の健康相談、手芸作品の展示、剪定作業等々、好きなことや得意なことでいろいろな人たちが集う場になっている。どれも参加している人たちの声から生まれたものばかりだ。助けてもらうだけでなく「誰かの役に立ちたい」「喜んでほしい」と誰もが思っている。そんな気持ちを生かす居場所は、〝行きたい場所〟であり楽しみが生まれている。その結果、介護予防をはじめとするさまざまな効果が生まれる。

一緒にいる場で認知症の理解と安心も広がる

ご存じのように、昨年1月に施行された認知症基本法に基づく基本計画で示された「新しい認知症観」には、認知症になったら何もできなくなるのではなく、「認知症になってからも、一人一人が個人として、できること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間等とつながり、希望を持って自分らしく暮らし続けることができる」とある。この機会に誰もが地域のつながりの中で希望を持ち、安心して暮らし続ける地域づくりを広げていけたらと思う。

先日、ある地域で行われたサロン同士の交流会に協力した。それぞれのサロンでの困り事や運営上の心配事について意見交換し、認知症の理解を深め、対応方法を学ぶ機会とすることを目的としていた。

私からは、認知症の人が常連として参加している共生型常設型の居場所を事例として紹介した。その居場所の代表者が大切にしているのは、認知症でも誰でも同じ対応、区別や差別はしないことだという。そして、「何でもお願いをする、頼んでみる、孤立させない」「失敗は誰にでもある」ということを会話の中で皆で共有し、失敗してもいい雰囲気をつくっているそうだ。さらに「できないこと、苦手なことは頼まない」とし、「プライドを傷つけない」「拒否しない」「強い命令はしない」ことも大切にしている。認知症の人たちのおかげもあり、居場所の参加者たちが優しく対応するようになっただけでなく、

認知症の人にも「心が明るくなり不安がなくなる」「家族も安心する」という効果が生まれているとのこと。特別扱いせず一緒にいる場だからこそ理解と安心が広がる。

こんな居場所だったら私も行きたい。皆さんはいかがですか。

事務所だより

●「地域助け合い基金」を担当する財団職員2人、〝草津〟からの助成申請についてどうも会話がかみ合わない。それもそのはず、東京出身のNさんは草津といえば群馬県の草津温泉、かたや関西出身のGさんにとっては草津といえば滋賀県草津市…。財団にいると、全国の地名にはけっこう詳しくなれます。

情報紙　助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

『さぁ、やろう』vol.27発行！

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さぁ、やろう』。

地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからダウンロードもできます。

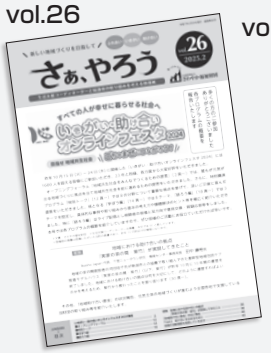
【vol.27目次】

◆寄稿　市町村への支援　和歌山県の取り組み
◆Topics特集
　助け合い活動の現場視察のススメ
　山梨県の実践事例から
◆Topics　助け合いを広めるために
　ＳＣ情報交換会
　住民向けフォーラム
　協議体で活動創出へ

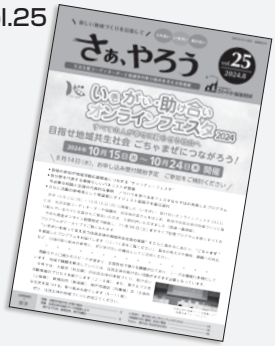
財団HPトップページ→「ライブラリー」→「さぁ、言おう・さぁ、やろう」にお進みください

vol.27

vol.26



vol.25



【お問合せ】メール　post@sawayakazaidan.or.jp
電　話（03）5470-7751

みんなの広場

本人の希望叶える支援が大事

地域包括支援センター
ケアマネジャー
生活支援コーディネーター
神奈川県

3月号の巻頭言は、チーム力、個の時代、つながりについて非常に理解しやすい記事でした。また、施設職員でもあった自分の経験から、本間郁子さんのエッセイ「看取りを支える②」にあった最期までご本人の希望を叶えられる支援は大事だと思います。

今後も、団地エリアの支援や見守り体制についての情報を取り上げてほしいです。

横浜市ケアプラザで、うちのSCと地域住民、まちづくりを学ぶ院生との大きなコラボ事業を5月に開催しました。

イベント終了後に、電話で当日の状況をうかがいました。

「5月6日のイベントは、包括の近所の神社で、移動販売やまちづくり・まちおこしに興味を持つ大学生・院生が企画した催しも実施。学生さんとは、日頃から包括への持ち込み企画等でつながりがある。ボランティアに熱心な住民が多い圏域で、今回のイベントには包括とつながりのあるボランティア活動者などお手伝いもたくさん参加。雨天だったが盛況で子どもも多く来てくれた」とのことでした。

（編集部）

情報提供ありがとうございます。包括、SCの皆さんと地域住民の皆さんとの交流がこのようにもっともっと進むよう私たちも応援していきます。

投稿募集

『さぁ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ皆様の声をお寄せください。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館７階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さぁ、言おう』編集部宛
FAX：(03) 5470-7755
E-mail：pr@sawayakazaidan.or.jp

『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。
さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人年会費	Aコース	10,000円
	Bコース	3,000円
法人年会費（1口）	Aコース	100,000円
	Bコース	20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

一般ご寄付をいただく場合のお振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団
郵便払込　００１２０-９-６６８８５６※
三井住友銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号２７５４５７４
みずほ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３３８３３２６
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３７３１７１４
りそな銀行　芝支店　普通預金　口座番号１１７４２９７

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金（硬貨）でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

＊お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話（03）5470-7751　メール　mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から　はり絵・池田げんえい

「夢雨」

編集後記 ●「生き方・自分流」は子どもと書道が大好きな川﨑繁子さん。自身の経験から「いつでも誰でもおいで！」と呼びかけて、書道教室にみんなが集まっています（Ｐ４～）。●「活動の現場から」は、日本海側最大の島・佐渡から。住民勉強会などから意識が醸成され、小地域でたくさんの活動が始まっています（Ｐ10～）。●4月25日の「堀田力さんを偲び　ふれあい社会を語る会」の報告を掲載しました（Ｐ29～「ＮＥＷＳ＆にゅーす」）。●今年も「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」を開催します。ぜひご参加ください！（裏表紙）

助け合いを
広げよう！

新 ひとりごと

樋口　恵子

たとえ楽しくなくても、楽しげに生きる。
これが何ごとも思い通りにいかなくなった高齢者の
賢い過ごし方です。
涙を流すのは物影で。
人知れず流した涙に比例して、あなたの受援力は、
いや増していきます。

●高齢社会をよくする女性の会名誉理事長
仕事と猫をこよなく愛して気づけば93歳。現在猫は３匹、１匹は私とほぼ同い年。あちこち不具合が生じて思うようにいかず笑顔も出にくいのですが、それでも、生涯一有権者、一消費者として社会に参加し、無理にでもにっこり笑って過ごしたいです。

さわやか 6月号

通巻382号　2025年6月10日発行
（毎月1回10日発行）
表紙絵　池田げんえい
編集担当　塩瀬潔泉
取材協力　七七舎
レイアウト　菊池ゆかり
印刷所　日本印刷株式会社

発行人　清水肇子
発行元　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751　Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
https://www.sawayakazaidan.or.jp
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

さわやかおーす 6月号
令和7年6月10日発行
（毎月1回10日発行）
通巻382号
発行人　清水肇子
発行元　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階

今年も開催

いきがい・助け合いオンラインフェスタ2025

開催：10月14日（火）～23日（木）

お申し込み受け付け開始は **8月中旬頃** の予定です

生活支援コーディネーターや協議体、行政、社会福祉協議会、地域包括支援センターなど住民主体の活動に関わる皆さん、全国各地で活動する方々の取り組みの参考としていただけるオンラインフェスタです。
「学ぼう編」「語ろう編」による多彩な事例や考え方を、学び合いの機会としてぜひご活用ください。

皆様のご参加をお待ちしています！

「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」の内容をまとめた『ダイジェスト版』は、財団ＨＰトップページ一番上のバナーをクリックするか、右のコードからご覧いただけます。引き続きご活用ください。

＜財団ホームページURL＞　https://www.sawayakazaidan.or.jp

◆ 内容やお申し込み方法など詳細は、決定次第、本誌や財団ホームページ等でお知らせします。